

Essay

Sapiarc.com

2012年6月12日(2012-6)

次兄本生のこと

5月21日未明、京都に住んでいた次兄の本生(もとお)が死去した。これまでに、このエッセイ欄に友人への追悼文を掲載したことがあったので、身内について書くことには若干の難しさはあるが、次兄への追悼文に類するものを書いておくことにした。

次兄に食道がんがあることがわかったのは2006年3月だった。その前年から食事の際に違和感があったようだが、嚥下するのが難しい状況になって、ようやく京都府立医大病院で受診した。このあたりに次兄の性格が表れている。それ以後、化学療法による治療を受けていた。

2006年の暮れに、母方の叔父牧冬彦が亡くなり、親族だけの葬儀が神戸市のお寺であり、翌2007年2月には、牧家の墓所がある高槻市安満(あま)で納骨式が行われた。そのどちらにも次兄は参加していた。他の参会者と普通に話をしており、変わった感じはほとんどなかったが、本人は、薬のせいでいつも頭がぼーっとしていると言っていた。納骨したあと、長兄、次兄、私の3人は予め手配してあったタクシーでJR高槻駅に出て、京都駅まで同行した。これは滅多にないことで、これが最後になった。

2007年11月末に、叔父の一周忌の集まりが神戸市であり、このときにも次兄は来ていた。しかし、遺族の挨拶などが終わって、会食に移ったとき、ひとりだけ先に辞去した。このときも、頭がぼーっとしていると言っていたので、

体調は良くなかったのだろう。私が次兄に会ったのは、これが最後になった。

その後、2009年8月に、それまで躊躇していた手術を受け、それは成功だったそうだが、昨年に入って、体調は再び不良となった。すい臓などへの転移もあったのかもしれない。(実はもっといろいろなことが起きていたようだが、ここでは触れない。)結局、去る4月半ばにまた入院したが、溜まっていた胸水を抜いてから、体力が急速に衰えた。本人の強い希望で、5月の連休のあと自宅に戻ったが、食べることはできず、点滴に頼る状況だったようだ。

葬儀は5月23日に京都市北区にある北山会館で行われた。無宗教の、儀式らしいものを全て省いた、参会者17人のほとんど完全な家族葬で、参会者4人が思い出などを語った。私もそのひとりだった。この形式は、本人の希望に沿ったものだったが、スッキリしていて良かったと思う。最後に、お棺の中を花で埋めたが、次兄の顔は痩せてはいたものの非常にきれいで、気品さえ漂わせていた。

次兄は昭和9年(1934年)7月7日の生まれなので(七夕なので憶えやすい)、享年77歳10カ月ということになる。日本人男性の平均寿命が79歳を少し超えている現在、長寿だったとは言えないが、本人はもう潮時と思っていたのではないか。次兄は人生の諸事に執着することのなかった人で、自分の死期にも一種の割り切りがあったのではないかと思う。

次兄と私が一緒に暮らした期間は、次兄が大学に入学するまでの（私が16歳になるまでの）16年間だが、1カ所で過ごしたわけではなく、4カ所にわたっていた。それらは、現在の地名で言うと、兵庫県西宮市仁川町四丁目、兵庫県神崎都市川町谷、東京都大田区雪谷大塚町、東京都杉並区清水一丁目だ。

兵庫県神崎都市川町谷は父方のルーツだ。ここには、太平洋戦争末期の昭和20年6月に空襲を避けるために疎開し、約10ヵ月間住んだ。大田区雪谷大塚町に居たのは、昭和26年9月からの約8ヵ月間だけだ。西宮からここに転居したのは、父の転勤に伴うもので、ここから杉並区に転居したのは、父の勤務先の事情（社宅間の移動）によるものだった。この杉並区の家と土地はのちに父のものとなった。

つまり、次兄と私が一緒に一番長く暮らしたのは、西宮市仁川（今ではニガワと読むのが正しいようだが、私たちはニカワと発音していた）の家に行ったときだったわけで、疎開期間を除くと約13年間だったことになる。私たちが通った小学校は西宮市立甲東小学校で、私が入学した昭和18年には、長兄が6年生、次兄が3年生だった。この年の4月からの1年間だけ、兄弟3人が同じ学校に通ったのだ。

甲東小学校は、宝塚(北)―西宮北口―今津(南)をつなぐ阪急今津線の甲東園駅と門戸厄神駅の中間にあり、この線路の西側に沿っている。私たちが小学生だったころは、周りはほとんど田圃だったので、今津線の電車の中から校舎と校庭が全部見えたのだが、現在はいろいろな建物がびっしりと取り囲んでいて、電車内から見える校舎と校庭はほんの僅かだけだ。もちろん校舎は新しいものになっている。

子供のときから次兄は大変器用で、いろいろなものを作るのが上手だった。太平洋戦争中と戦後間もないころで、遊び道具がなかったので、次兄にとっては物作りが遊びになっていたのだ。疎開中の昭和20年から21年にかけての冬は寒く、雪もよく降った。そういうときには竹馬に

乗って遊んだ。その竹馬は次兄が作った。初めは、地上30cmぐらいの高さに乗るものだったが、後になると子供の背丈を超える高いものを作った。これに乗るときには、家の敷地を囲んでいた土塀の上から乗った。私も乗ってみたが、少々怖かった。

次兄の指の爪は横長の形をしており、そのような形の爪をもっている人には器用な人が多い。次兄は絵を描くのも上手で、とくに動植物を実物どおりに描くことができた。これは、のちに動物学を専攻するようになってから、役に立ったはずだ。音感も良かった。これらの資質は母から受け継いだもので、兄弟3人のなかで次兄が一番母に似ていたと思う。次兄は我慢強い性格だったが、その点でも母に似ていた。

太平洋戦争が終わってから2年足らずの昭和22年(1947年)4月に、学制改革があり、新制中学が発足した。次兄はこのとき小学校を卒業し、西宮市立甲東中学校（3年後に甲稜中学校と改称して移転）に入学した。この学制改革はかなり混乱した状況で行われたものだった。地域によって状況は大きく異なっていたようだが、阪神間には有力な私立の旧制中学があり、これらは新制高校と併設の新制中学になった。したがって、こういう有力私立中学に進学することもあり得たのだ。実際、次兄はある私立中学の入試を受けて合格したのだが、それを振って、甲東中学校に進んだ。

発足したばかりの甲東中学校は甲東小学校の校舎に同居していたので、私たちは2年間同じ学校敷地に通学した。中学時代の次兄には逸話がある。3年生のとき、生徒会長の選挙があり、次兄は候補者のひとりになった（立候補したわけではなかった）。候補者が抱負を語る演説会があったのだが、そこで、次兄は、自分は生徒会長に不向きな人間なので、別の候補者に投票して欲しいと訴えた。これが大いに受けて、次兄は圧倒的な得票率で生徒会長に選ばれてしまった。この「事件」は、生徒多数に極めて強い印象を与えたようで、私の小学校同級生で甲東中学に進んだ者たちが後あとまで話題にした。後年、次兄には「変わっていて面白い人」とい

う評価が定着していたと思うが、この評価はこの「事件」のときに始まったようだ。

昭和 24 年に、私が甲東小学校を卒業するときには、公立中高と私立中高の関係ははっきり変化しており、周りから勧められて、私は私立の灘中に進んだ。更に 1 年後に、今度は次兄が灘高に入学した（当時、灘中は 1 学年 3 クラスで、灘高は 1 クラス増の 1 学年 4 クラスだった）、私たちはまた同じ学校敷地に通学した。しかし、次兄が灘高に在籍したのは 1 年半だけだった。

父は、ある会社の大阪支店に 20 年以上勤めていたのだが、昭和 26 年になって、東京本社に転勤することになった。今と違って、当時は転勤ということ自体が大事件で、単身赴任という考えも未だなかったのだから、一家は東京に転居することになった。中学は義務教育だから、どこかの中学に転入できる。高校はそうではないから、どうするかが問題になった。既に京大の学生だった長兄が上京して、編入学を認める高校を探したところ、都立戸山高校があった。そこで、次兄は戸山高校の編入試験を受けて合格し、昭和 26 年 9 月初めから戸山高校に編入学した。転居したのは、その年の 9 月半ばだったので、次兄は、武蔵境にあった会社の宿泊施設に父と 2 人で半月ほど住んで、高田馬場駅の近くの戸山高校に通った。

高校を卒業したあとの次兄は、自分の進路について試行錯誤を繰り返した。こういう人は珍しくはないが、次兄の場合は、京都大学理学部に落ち着くまでに別の 2 大学に入学するなど、振れは相当に大きなものだった。京大理学部に入ってから、専攻を地質学から動物学に変えた。しかし、結果的には、動物学は次兄にとってベストの選択だったと思う。

理学部に「落ち着いた」と書いたが、これは必ずしも正しい表現ではないかもしれない。というのは、次兄は、多分京大にだけあった探検部というサークルに入っていて、当時は簡単ではなかった海外遠征に加わりたと思っていた形跡があるからだ。探検部は、今西錦司ら有名

教授の影響を受けており、その活動はマスコミがよく取り上げた。のちに朝日新聞記者として大活躍した本多勝一も同時期に探検部に居たはずだ。次兄もマスコミに就職したいという希望をもっていたことは確かだ。

大学院に入ってから、次兄が研究した対象はネズミの歯の形態だったはずだ。指導教員は徳田御稔(とくだ・みとし)という先生で、この先生との出会いは、次兄のその後の研究者人生に大きな意味をもった。修士課程を終えた後、東京医科歯科大学歯学部解剖学教室の助手(現在の呼び名は助教)となった。この職に就いていたのは、昭和 37 年から 5 年間ほどだった。この時期の初めには、次兄はまた杉並区の家に戻っていた。医学部や歯学部の出身者でない次兄が解剖学教室に勤めることは大変なことだったろうと思うが、次兄から仕事が嫌だという話は聞いたことはなかった。その後、次兄は東北大学歯学部に移り、さらに犬山市の日本モンキーセンターを経て、1971 年 5 月に京大理学部の助教授(現在の呼び名は准教授)に就任した。

上記の約 10 年間の後半は、次兄と私との関係が希薄だったときだった。この時期に(1968 年)次兄は東北大学から医学博士の学位を得た。何故京大理学部に学位論文を提出しなかったのか、私は知らない。学位論文の実物を見た記憶はないが、内容はネズミの歯に関するものだったはずだ。イタリア語で書いたと聞いたが、学位論文を書けるほどのイタリア語をどのような方法で習得したのか、イタリア語の学位論文を誰が審査したのか今でも不思議に思っている。

(このエッセイをホームページに掲載したあとで、博士論文をイタリア語で書いたというのは誤りで、1959 年発表の処女論文「ネズミ類の離乳期における形態変化」(動物学会誌)の要約をイタリア語で書き、それを書く手助けをした人が誰だったかも判明した。)

次兄にとって、出身の京大理学部動物学教室に戻ったことは嬉しかっただろう。しかし、次兄の専門である古典的な生物学を取り巻く環境は厳しくなっていた。1950 年代に生まれた分子生物学が急速に発展しており、古典的な生

物学の存在を脅かし始めていたからだ。多くの生物学者は分子生物学か、それに関係のある研究分野に移り始めていたのだ。そのなかで、次兄は古典的な生物学に踏み止まった。これは簡単なことではなかった。

科学の研究は夢のある行為として語られることが多い。しかし、現代の理学分野の研究者にまず求められることは、先端的な分野でオリジナルな研究成果をあげ、それを評価の高い学術雑誌に発表することだ。次兄のように、古典的な生物学に踏み留まろうとすると、このような通常のパターンから外れてしまう可能性がある。次兄は、この危険性をもちろん承知していただろう。

私は、次兄が研究論文をどういう形で発表していたか知らない。次兄の仕事として知られているのは、動物の進化に関する重要な文献を翻訳したことだ。とくに、1978年に出版したE.H. コルバート著「脊椎動物の進化」上下2巻は大変な専門書で、翻訳するのも容易なことではなかったはずだ。次兄は、その後もこの分野の本の翻訳をした。しかし、残念ながら、理学分野では翻訳出版は第一義的な業績とは見なされないのだ。

次兄には、一般向けの本の翻訳もあり、S.J. グールド著「パンダの親指」はよく知られており、現在でも市販されている。このような一般向けの本においては、次兄は本名ではなく桜町翠軒(さくらまち・すいけん)というペンネームを用いた。一般向けの本の翻訳は余技に過ぎないということをはっきりさせたかったのだろう。これは、学者としての矜持を示すものとして評価されて良い。桜町は、次兄が住んでいた京都市の北西部にある平野神社が桜の名所であることに因んだもので、翠軒はマンションの屋根が緑色だったことによる。

上記のような翻訳を通じて、次兄の知名度は高かった。私は、「京大の田隅本生さんとはどういうご関係ですか?」という質問をしばしば受けた。知名度を高めたもうひとつの原因は、いわゆる動物学者、つまり、マクロの動物に関

する知識を持っている研究者が少なくなったため、次兄は動物の骨などの鑑定を依頼されることが多くなっていたことだ。何時のことかは憶えていないが、日本海で見つかった大きな動物または魚の骨が未知の生物のものではないかとマスコミが騒いだことがあった。結局、それは大型のサメの骨だということになったのだが、その鑑定をしたのは次兄だった。骨を見せると、何の骨かピタリと当ててくれる人という評判が立った。しかし、本人はそんなことはできないとあっさり否定していた。

退職してから、次兄は、それまでとはひと味違う出版も手がけたが、そのなかで、「牧野四子吉 生物生態画集」は見ている飽きないものだ。この画集の監修は大変な作業だったはずだが、田隅本生監修ということは、この本の最後に小さな字で記載されているに過ぎない。次兄としては、この出版によって、牧野四子吉(まきの・よねきち)の画業を顕彰することを第一とし、自分のことはできるだけ控え目にしておきたかったのだろう。次兄らしい配慮だったと思う。

次兄は、生涯をかけて、古典的な生物学の奥深さを研究者に伝えるとともに、その面白さを一般の人々にも知らせることに力を尽くした。これは高く評価されて然るべきものと思う。

(おわり)